趣味・紀行：昔の函館・豆知識

函館市医師会
はこだて港町眼科
松下（まつした）　知弘（ともひろ）

函館市内に開業して３年目になります、はこだて港町眼科の松下知弘と申します。つい最近、函館出身ではない私がまだまだ知らない函館の歴史について勉強する機会があり、この度執筆の機会をいただきましたので、すでにご存じの方も多いかと思いますが昔の函館についての豆知識を書かせていただきます。

「函館」といえば夜景を思い浮かべる方も多いかと思います。函館山の頂上付近にある展望台から見る美しい夜景は、函館湾と津軽海峡とに挟まれた函館の街並みからなるものです。実はこの美しい夜景のくびれた部分は、約100万年前に起こった海底火山の噴出物が土台となり、隆起・沈下を繰り返して現在の函館山の部分が島として出現しました。その後、島と渡島半島の間に土砂が堆積して砂州が形成され、中央部分がくびれた独特な地形となりました。このくびれた地形のことを「トンボロ（陸繋砂州）」と呼び、現在の市役所を含めた函館の主要な市街地はそのトンボロの上にあります。

「函館（箱館）」の地名の由来は、室町時代の1454年（享徳３年）、津軽の豪族・河野政通が函館山の北斜面にあたる漁村・宇須岸（ウスケシ：アイヌ語で「湾の端」という意味）に館を築き、形が箱に似ていることから「箱館」と呼ばれるようになったといわれています。また、アイヌ語で「ハクチャシ（浅い砦）」に由来する説など諸説あります。

明治時代に長崎や横浜とともに日本初となる対外貿易港として開港した函館は当時、外国から函館に移住した居留外国人のために、長崎のような出島方式（人工島）の外国人居留地を函館に造る予定があったようです。しかし、出島計画がなくなり居留外国人の居住が市内に点在したため、西部地区をはじめとした異国情緒あふれる函館の美しい街並みが残りました。出島が完成していれば、現在とはまた違った街並みになっていたのかもしれません。

1895年（明治28年）、日清戦争終結後、日露戦争に備え、函館山には函館要塞として、砲台や発電所、観測所などの施設の建設が始まりました。函館山全体が軍事機密となったため、当時の地形図から函館山が消滅し、一般人の入山はもちろん山の写真撮影やスケッチさえ禁止されていました。現在の函館山には砲台の跡地などが残っているほか、約半世紀にわたり立ち入り禁止だったことが影響し、函館山の自然が守られ、現在でも貴重な草花や絶滅寸前の生物が生息しており、2001年（平成13年）10月には北海道遺産に選定されています。

こうして自分の住む町のことを改めて勉強すると、ますますこの土地に愛着が湧いて、改めて地域医療に貢献したいという思いを強くする今日この頃です。

多国籍研究室インディ500

札幌医科大学医師会
札幌医科大学附属病院
小船（こぶね）　雅義（まさよし）

20年以上も昔の話です。私は造血幹細胞研究で一躍有名となった米国中央部インディアナ州立大学に留学に赴きました。飛行機に乗り現地到着するまでが苦難の道のりでした。私は英語を全く話すことはできず、今から思い返すと何と無謀なことをしたものだと冷や汗をかいてしまいます。初めての米国行きの国際線であったため、シカゴ・オヘア国際空港での入国審査で見事に引っ掛かり、厳重な個別審査を経て、インディアナポリス国際空港に２便遅れで到着しました。幸いなことに、お迎えの研究室の米国人２人が待っていてくれましたが、私が英語を喋れないことに気づき大層唖然としたようでした。翌日に研究室に出勤した後は、ノートに筆談で書き記すことでコミュニケーションが取れることに、また驚かれてしまいました。話せても読み書きができないことが普通らしく、私は不思議な存在であったようです。その研究室には、私の他に日本人はおらず、中国、ドイツ、スペイン、インドネシア、インド、オーストラリアおよび米国人の研究者で構成された国際色豊かな職場でした。

インディアナポリスは、シカゴの南、車で2.5時間のところにある都市で、人口は札幌と同等、北海道とほぼ同じ緯度にあります。インディアナ州は内陸ですが、平坦で暖かい土地です。北にトウモロコシ畑が地平線まで続き、西には草原地帯が広がっています。インディアナポリスで最も有名なのは、インディアナポリス・モーター・スピードウェイである世界３大レースの１つインディアナポリス500（インディ 500）で、2017年に佐藤琢磨さんが、日本人ドライバー初の優勝を成し遂げた事で有名です。レースの時には世界中からレーサーや観客が集まってきて、インディ 500の会場の周囲はキャンピングカーで埋め尽くされます。

この留学生活で最も印象的だったのが、私の留学した研究室では、ボス以外との上下関係は希薄で、国境はなく、研究結果に関しての討論は徹底的にしますが、仕事を離れれば、普通に友人に戻ることでした。私は中国人とドイツ人の発音が聞きやすく、留学半年くらいたったころから、それぞれの国独特の「なまり」のある英語で会話をしていましたが、研究室のオーストラリア人から、「あなた方は何語を喋っているの」と、オージ「なまり」のある英語で多分ジョーク（？）を言われたことが楽しい記憶として残っています。　あれから20年経過して、英会話をする機会は殆どありませんが、イザとなったら筆談と度胸がつきました。